

いちご主要品種に対する青枯病耐病性品種間差異

1. 成果の要約

いちご主要品種のイチゴ青枯病 (*Ralstonia solanacearum*) に対する耐病性を検討した。その結果、栃木 i27 号 (商標名: スカイベリー, 以下スカイベリーと表記) > 福羽 > なつおとめ > とちおとめ > とねほっぺ > 女峰の順に発病度が高かった。スカイベリーについては、他の供試品種でほとんど発病が認められなかった接種 7 日後から発病が認められ、その後の発病も他の品種に比べ高く推移し、これまで本県の主要品種であった女峰やとちおとめに比べ、本病に対する感受性が高いことが明らかになった。

2. キーワード

スカイベリー、イチゴ青枯病、品種間差

3. 試験のねらい

2013 年、2017 年に県内のいちご苗生産ほ場においてイチゴ青枯病が発生し問題となった。その発生状況は、とちおとめに比べスカイベリーで顕著であった。そこで、いちご主要品種におけるイチゴ青枯病耐病性を接種検定により検討する。

4. 試験方法

試験はいちご品種、スカイベリー、とちおとめ、なつおとめ、女峰、とねほっぺ、福羽を供試し、1 区 10 株の 3 反復で行った。スカイベリー分離菌株 (Sky-Rs) を CPG 液体培地で 30°C、24 時間培養後に集菌して培養液を除き、殺菌蒸留水で 10⁹cfu/ml に調整し 2018 年 8 月 15 日に 1 株あたり株元に 5ml ずつ断根かん注接種した。初回 7 日、その後は 14 日間隔で発病株率及び発病状況を程度別に調査し発病度を算出した。

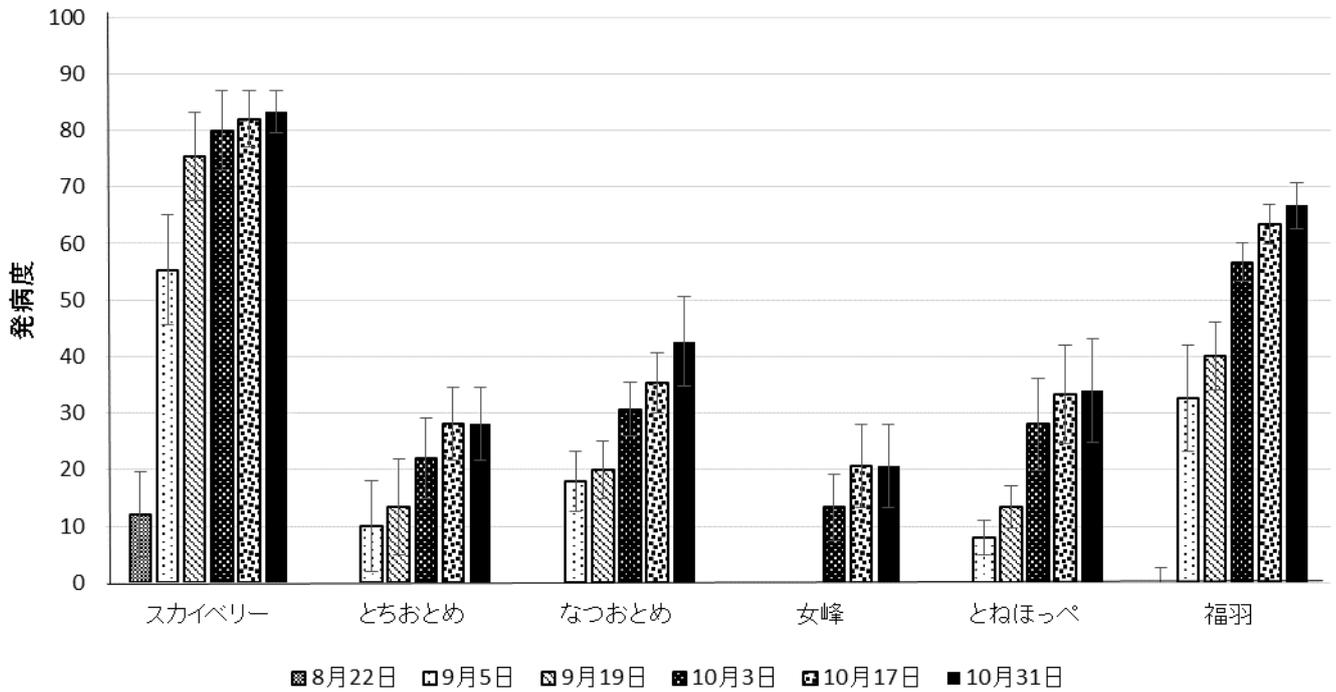
5. 試験結果および考察

(1) イチゴ青枯病菌をいちご 6 品種に接種したところ、最終調査日 (接種 77 日後) の発病度は、“スカイベリー”83、“福羽”67、“なつおとめ”43、“とちおとめ”28、“とねほっぺ”34、“女峰”21 の順に発病度が高かった (図-1)。

(2) スカイベリーは、他の供試品種でほとんど発病が認められなかった接種 7 日目から発病が認められ、その後の発病も他の品種に比べ高く推移した (図-2)。

以上の結果からスカイベリーについては、これまで本県の主要品種であった女峰やとちおとめに比べ、イチゴ青枯病に対する感受性が高いことが明らかとなった。

(担当者 研究開発部 病理昆虫研究室 福田充)



- a) 発病度は3区の平均を示す。発病度 = $\frac{\sum(\text{発病指数} \times \text{同株数})}{(5 \times \text{調査株数})} \times 100$
 発病指数は、0: 発病なし、1: 葉の軽微な萎れ(1枚)、2: 葉の萎れ(2枚)、
 3: 葉の萎れ(3枚以上)、4: 株全体の萎れ、5: 枯死
- b) エラーバーは標準誤差を示す

図-1 イチゴ青枯病菌 (Sky-Rs) のいちご主要品種に対する発病度推移

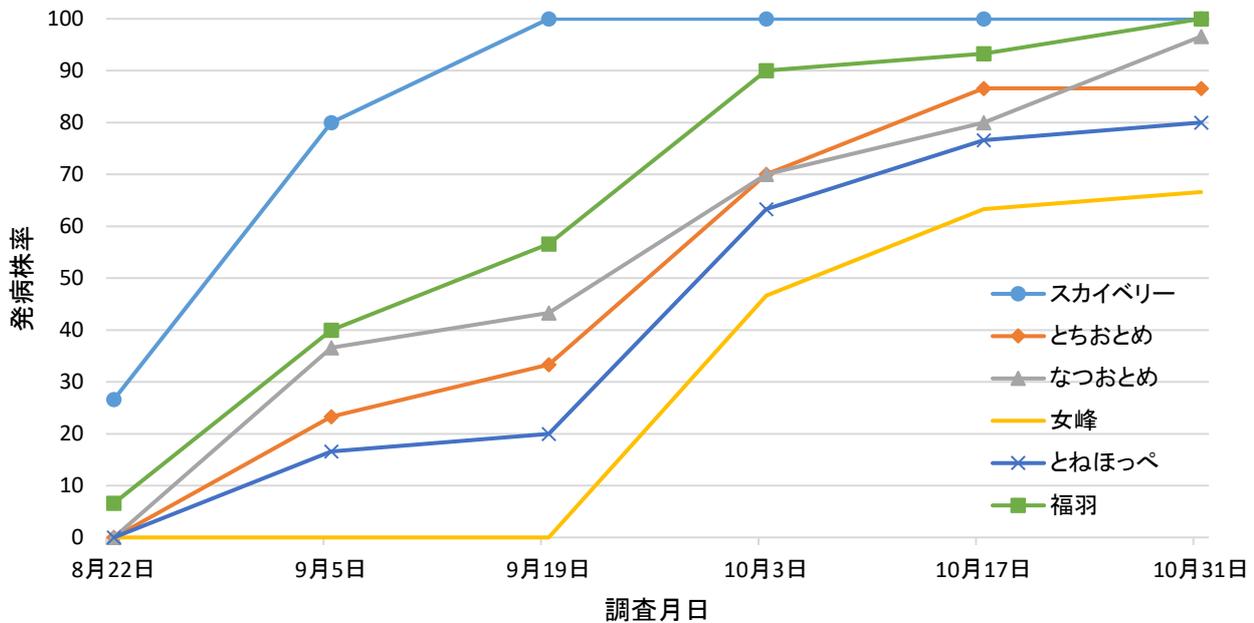


図-2 イチゴ青枯病菌 (Sky-Rs) 接種後のいちご主要品種発病株率推移
 接種は8月15日